



京都 在宅医療

検索

※今後の研修会開催予定一覧です。演題名等詳細は順次、京都医報、当センターホームページでご案内いたします。

※動画は申込締切の23:53まで視聴できます

研修会名	配信期間	講師・テーマ	申込
京都在宅医療塾 実践編	令和8年 3月31日(火) 正午申込締切	洛和会音羽病院 院長補佐 総合内科 部長 洛和会音羽病院教育センター センター長 谷口 洋貴氏 まつだ在宅クリニック 院長 松田 かがみ氏 テーマ 「POCUSで 腹部と下肢(下肢静脈血栓)を診てみよう！」	
令和7年度 京都在宅医療塾 ZERO	令和8年 5月7日(木) 正午申込締切	角水医院 院長 角水 正道氏 テーマ 「症例編(脳梗塞・肺炎・看取り)」 京都府立医科大学附属病院 看護部管理室 副看護部長 患者サポートセンター 副センター長 光本 かおり氏 テーマ 「病院と在宅チームとの橋渡し 患者サポートセンター ～特定機能病院における入退院支援の実際～」	
令和6年度 京都在宅医療塾 ZERO	次回 診療報酬改定 まで	角水医院 院長 角水 正道氏 テーマ 「ゼロからの在宅保険請求 訪問看護師・ケアマネジャーとの連携」	
第2回 京都在宅医療塾 探究編	令和8年 3月31日(火) 正午申込締切	日本在宅医療連合学会 代表理事 日本認知症の人の緩和ケア学会 理事長 平原 佐斗司氏 テーマ 「腎不全の在宅緩和ケアと 保存的腎臓療法(CKM)」	
第3回 京都在宅医療塾 探究編	令和8年 5月15日(金) 正午申込締切	京都府立医科大学附属病院リハビリテーション部 准教授 沢田 光思郎氏 京都府立医科大学大学院 リハビリテーション医学教室 准教授(集学的身体活動賦活法開発講座) 大橋 鈴世氏 京都府立医科大学大学院 リハビリテーション医学教室 学内講師 垣田 真里氏 京都府立医科大学大学院 リハビリテーション医学教室 助教 櫻井 桃子氏	

在宅医療に関する質問があればお問い合わせください。サポートセンターと保険医療課で連携し回答いたします。

お問い合わせ、ご意見及びご感想は
京都府医師会在宅医療・地域包括ケアサポートセンター
〒604-8585 京都府京都市中京区西ノ京東桐尾町6番地 京都府医師会館3階
tel.075-354-6079 fax.075-354-6097

京都府医師会

在宅医療・地域包括ケア サポートセンター news

Vol. 58

2026年3月15日

京都府医師会在宅医療・地域包括ケアサポートセンター
〒604-8585 京都府京都市中京区西ノ京東桐尾町6番地 京都府医師会館3階 tel.075-354-6079 fax.075-354-6097

※当センターホームページにてバックナンバーがご覧いただけます。

Menu

- ◆令和7年度 京都地域包括ケア 府民公開講座 開催報告 (P.1、2)
- ◆令和7年度 第2回京都在宅医療戦略会議 開催報告 (P.3)
- ◆オンデマンド配信一覧 (P.4)

令和7年度 京都地域包括ケア 府民公開講座 開催報告



夏井 いつき氏

令和7年11月29日(土)、京都府立京都学・歴彩館にて、俳人・夏井いつき先生を講師に迎え、「辞世の句ってかっこいい」と題した府民公開講座を、京都地域包括ケア推進機構および京都府訪問看護ステーション協議会との共催で開催し、423名の府民の方々にご参加いただきました。

講演では、テレビ番組「プレバト!!!」の裏話を交えながら、俳句を趣味として人生に取り入れることの魅力について語っていただきました。現代では多くの人が「自分の内側」に意識を向けがちである一方、俳句という表現活動はそのベクトルを外へと開き、季節や社会、他者とのつながりを取り戻す力があるとともに、視線を外へ向けることで「自分を俯瞰する力」を育ててくれるというお話をされました。その例として、正岡子規の辞世の句「糸瓜(へちま)咲いて 痰のつまりし 仏かな」を紹介されました。自分の体の様子を静かに見つめ、咲き誇る糸瓜の季節感と重ね合わせて詠んだこの句は、まさに外へ向けた視点から生まれた作品であると説明されました。



夏井先生は、俳句を始めるための第一歩として「毎日12音で日記をつくる」という手軽な実践を紹介され、短い言葉で日々を切り取る習慣が、感性を磨き、人生を豊かにすることにつながると強調されました。

また、11月30日が人生会議の日であることをお話しされ、「毎年、人生会議の日(11月30日)に自分の辞世の句を更新してみる」という提案もされました。死を重く捉えるのではなく、むしろ自分の価値観や生き方を見つめ直す機会として向き合うことの大切さを語られ、会場は温かな雰囲気になりました。俳句を通じて人生の最終章を考えるという視点は、多くの参加者に学びを与えてくれました。

講演終了後のアンケートでは、334名の方より回答をいただきました。参加者の性別や年代、「ACPや人生会議の認知度」で自身が死を意識した時から最期の時を迎えるまでに望まれることの結果とあわせて、講演についての感想の一部を紹介いたします。

令和7年度 第2回京都在宅医療戦略会議 開催報告

令和7年12月20日(土)、京都府医師会館にて「第2回 京都在宅医療戦略会議」を開催しました。当日は、地区医師会、行政、病院、在宅医療・介護関係者などが参加され、在宅医療・介護連携の現状や課題、今後の方向性について、さまざまな視点から意見交換が行われました。



1. 京都市における在宅医療・介護連携推進事業の状況について

(京都市域在宅医療・介護連携推進連絡会議)

京都市からは、今年度の在宅医療・介護連携推進事業の研修会について報告があり、前半は国の手引き改定を踏まえたeラーニング、後半は参集型のグループワークで、各センターが抱える課題を題材に多職種で意見を交わす内容でした。延べ約100名が参加しました。

西京区在宅医療・介護連携支援センターより、地域の特性を踏まえた取り組みが紹介されました。センターは医師会事務局と同フロアにあり、医師会や訪問看護ステーションとの情報共有が日常的に行える点が大きな強みです。また、医師・歯

科医師・薬剤師・看護師に加え、リハ職や管理栄養士など多職種が一堂に会する「西京よろし会」を開催し、職種の垣根を越えた連携を深めています。

続いて、センターの好事例を紹介されました。コロナ禍では、病院ごとに面会ルールが異なり、地域の混乱を招いたことから、センターが主体となってアンケートを実施し、情報を整理して地域へ共有されました。こうした活動が、地域全体の連携を支える基盤となっていることが伝えられました。

2. 京都第二赤十字病院における地域医療連携の現状及び体制・取組みについて

京都第二赤十字病院からは、まず地域医療連携・入退院支援室は前方連携と後方連携で、事務部と看護部で分担して行っていることが説明されました。

前方連携では、京都府立医科大学附属病院・京都第一赤十字病院・京都第二赤十字病院・京都市立病院・京都大学医学部附属病院が共同で運用するWeb予約システム「SAKU 洛連携」により、紹介・検査予約の効率化が進んでおり、登録医療機関は1,000件を超え、来年度には国立病院機構京都医療センターも参加予定です。緊急依頼は年々増加していますが、専用ピッチの

導入により、約9割が15分以内に返答できる体制が整いました。

一方、後方連携では、独居高齢者や身寄りのない方など、社会的課題を抱える患者の受け入れ調整が難航するケースが増えていることが紹介され、入院希望病院を事前登録できる「在宅療養あんしん病院登録システム」の普及が進めば、調整負担の軽減につながる可能性があるとの期待が示されました。入退院を繰り返す患者も多く、地域のかかりつけ医や在宅医、ケアマネジャーとの連携強化が今後の重要な課題となっています。

3. 介護認定審査会について

京都市より介護認定審査会委員の負担軽減に向けた取組み案について説明がありました。簡素化対象者の事前資料の送付を廃止することや、委員の確保が困難な地域の合議体の

削減など委員の負担軽減が期待されるものです。令和9年度からの見直しに向けて引き続き医師会等と協議していく姿勢が示されました。

4. 下京西部医師会の看取り当番制度

下京西部医師会が取り組む、看取り当番制度について報告がありました。制度自体は整備されているものの、実働は2例にとどまっており、医師・患者双方に「主治医による看取り」を望む

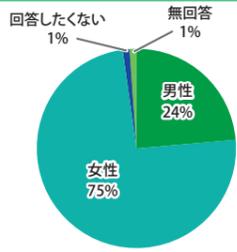
意識が強いことが背景にあると考えられます。今後は、医師が無理なく在宅医療を続けられる働き方や、制度の周知、医師同士の信頼関係づくりが重要であるとの意見が示されました。

5. 全体意見交換

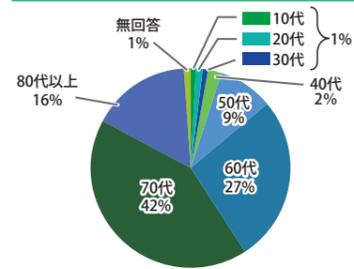
意見交換では、一部の事業者による囲い込みや過剰サービス提供が地域包括ケアを揺るがすとの懸念が共有されました。行政による指導監督の強化や、医師会・多職種連携の重要性が改めて確認されました。本会からは、こうした課題を共有

する場として本会議の意義を強調し、国への働きかけを強めるためにも日本医師会・京都府医師会・地区医師会の会員増強に向けた取組みについて、理解と協力を呼びかけました。

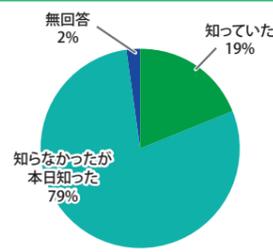
性別



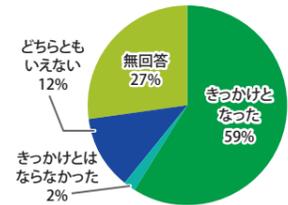
年齢



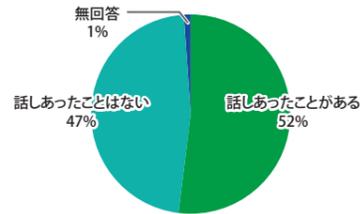
ACPや人生会議について



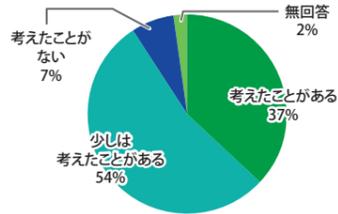
本日の講演は大切な人たちと「自分がこれからどう生きたいか」話し合うきっかけとなりましたか。



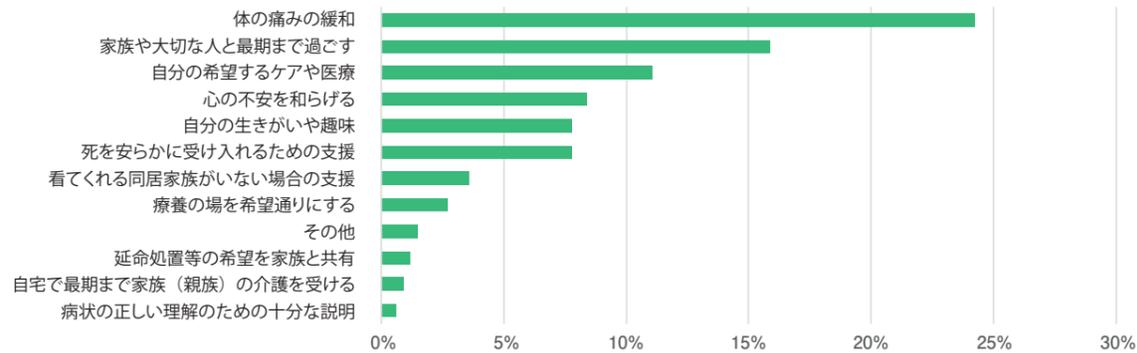
ご自身の死が近い場合に受けたい医療行為や受けたくない医療行為について、ご家族とどのくらい話あったことがありますか。



これまでに、人生の最終段階の生き方(過ごし方)について、考えたことはありますか。



● ご自身が死を意識したときから、最期の時を迎えるまでに、最も望まれるもの ●



● 講演についてのご感想 ●

夏井先生をプレバトで拝見し、家族でファンなので、親子3人で伺いました。トーク力、内容の充実度、俳句への興味を引き出す面白いお話、ユーモア、すべてが大満足です。来てよかったです。(20代女性)

俳句をしている者にとって大変良い話でした。目から鱗の事が多かったです。11月30日を辞世の句を選ぶという事、大変だと思いますがやっていきたいと思えます。(80代女性)

避けてきた事ですが、今日をきっかけに家族と「人生会議」を共有したいと思えます。(80代男性)

俳句の持つ特徴を分かりやすく説明して下さった。それが人生にどう関わるのかを繋いでくれて、面白かったです。(60代男性)

俳句がまさかこんな風に認知症、うつ病予防の健康に生きるための力になるとは、想像もしていませんでした。先生のお話はテレビの面白話から引き込まれ、面白くて楽しくて有意義な時間でした。(70代女性)

ACP、人生100年時代がテーマの講演の中でピカイチだったと思います。日々の暮らしや自分の人生を見つめなおし、楽しく生きていく為の俳句の活用を面白くご提案いただけたいと思います。(60代男性)

● あとがき ●

講演会終了後のアンケートでは、「ACPや人生会議という言葉を知っていたか?」という問いに対し、「本日初めて知った」と答えた方が約8割(79%)にのぼり、多くの方にとって今回の講演が「ACP」や「人生会議」という言葉に初めて触れる機会となったことがわかります。「ご自身が死を意識してから最期の時を迎えるまでに望むこ

と」としては、「体の痛みの緩和」(24%)や「家族や大切な人と最期まで過ごすこと」(16%)が多く挙げられました。

また、講演会が「大切な人と自分の生き方を話し合うきっかけになった」との回答も約6割(59%)あり、講演が単なる知識の提供にとどまらず、自身の生き方や大切な人との対話を考えるきっかけとなったことがうかがえます。今後もこうした機会を継続していくことが大切だと感じます。